

石川県における平成 30 年度スモン患者の検診結果と支援

菊地 修一（石川県健康福祉部）
筋 昭三（城北病院）
大川 義弘（城北クリニック）
相川 広一（石川県健康福祉部）
竹本 玲湖（石川県健康福祉部）
堺 知里（石川県健康福祉部）
箕田 都子（石川県健康福祉部）
福島さやか（金沢市）
川淵 里子（金沢市）
山下 若菜（金沢市）

研究要旨

スモン検診受診者 4 名について、現状をまとめ前年度の状況と比較し、支援体制を検討した。年齢は、65 歳～82 歳（平均 73.5 歳）、発症年齢は 15 歳～32 歳（平均 24.0 歳）、発症後の経過年数は、49 年～50 年（平均 49.5 年）であった。居所は 4 名全員が自宅であった。在宅のうち介護保険サービスを利用している方は 1 名であった。また、「今受けている介護やこれから先に必要となる介護について不安に思うことがある」と 4 名全員が回答した。

医療受給者証の継続申請時や検診時等に、定期的な面接の実施や随時の相談対応等により、問題を早期に把握し必要な支援を適切かつ迅速に提供していくことが必要であるとともに、すでにサービスを利用している方については、保健師が必要時、市町や介護支援専門員等の支援者と連絡をとりながら、状況を把握し支援していくことが必要である。

A. 研究目的

スモン患者の平成 30 年度の検診結果をまとめ、前年度の状況と比較し、必要な支援がなされているか、QOL 向上の視点で支援体制を検討した。

（倫理面への配慮）

受診者本人（家族）から受診時にデータ解析・発表について文書または口頭で同意を得た。なお、データは匿名化して、個人を特定できないようにして解析した。

B. 研究方法

スモン検診対象者 4 名全員に対し検診を実施し、検診結果や保健師による日常生活状況等のききとり結果をまとめるとともに、県や市町等での関わりの状況を整理し、支援のあり方について検討した。また、県内の若手保健師等を対象に研修会を開催し、スモンの啓発を行った。

C. 研究結果

(1) スモン患者の現状

年齢は、65 歳～82 歳（平均 73.5 歳）、発症年齢は 15 歳～32 歳（平均 24.0 歳）、発症後の経過年数は、49 年～50 年（平均 49.5 年）であった。居所は 4 名全員が自宅であった。Barthel インデックスは 100 点が 2 名、95 点が 2 名で（平均 97.5 点）であった。

視力の程度は、「ほとんど正常」が1名、「新聞の大出しは読める」が1名、「新聞の細かい字も何とか読めるが読みにくい」が1名、「眼前手動弁」が1名であった。下肢筋力低下は4名全員に見られ、うち「高度」は1名であった。歩行は、「独歩」が1名、「独歩やや不安定」が1名、「つかまり歩き」が1名、「一本杖」が1名であり、全員が「時々外出する」状態であった。「異常知覚」は全員に見られたが、うち「高度」は1名であった。「上肢運動障害」が見られる患者はおらず、自律神経症状では、「下肢皮膚温低下」が軽度1名、「尿失禁」が常にある患者が1名であった。

介護については、「必要な時に介護をしてもらっている」が2名、「介護は必要なし」が2名であった。介護保険利用は1名で、要支援1であり、通所介護と居宅介護支援のサービスを利用していた。身体障害者手帳については2名（1級1名、3級1名）が所持していた。

「今受けている介護やこれから先に必要となる介護について不安に思うことがある」は4名全員であり、不安に思う内容（複数回答）は、「介護者の高齢化」、「介護者の疲労や健康状態」がそれぞれ4名、他に「通院頻度や通院先が増える」「適当なサービス提供機関がない」などが挙げられていた。

生活の満足度は、「満足」「どちらかという満足」「なんともいえない」「どちらかという不満」が、それぞれ1名であった。今以上に介護が必要となった場合の見通しについては、「家族の介護でこのまま自宅で暮らしていける」が2名、「家族の介護と介護サービスの利用を組み合わせれば自宅で暮らしていける」が2名であった。

(2) 前年度との比較

4名のうち前年度と比べて変化があった方は2名で、1名は「異常知覚」「膝蓋腱反射」「アキレス腱反射」がいずれも亢進していた。もう1名は、「下肢触覚」「アキレス腱反射」「Clonus」が亢進し、精神症状で健康への不安や家族の病気等により、「不安・焦燥」「睡眠障害」が表れて、新たに精神科に受診していた。4名とも Barthel インデックスや要介護度には、変化は

見られなかった。

(3) 支援の現状

検診は、4名とも主治医や検診医が医療機関で行った。検診では、患者の居所を管轄する県保健福祉センター（金沢市は福祉健康センター）の保健師が同行し、問診等を行うとともに、年に1回の医療受給者証の継続申請時に、各保健福祉センターで職員が支援調査シートを用い面接にて状況把握を行い、必要な支援につなげている。また、県各保健福祉センター（金沢市福祉健康センター）では随時相談対応等を行っている。

(4) 研修会の実施

県と金沢市の若手保健師等を対象に、スモンの現状や課題について検診担当医を講師に研修会を行った。

D. 考察

在宅での生活を希望し、在宅生活を送っている方々は、各々の状態に応じて通所介護や居宅介護支援等、必要なサービスを利用し生活をしている。しかし、今受けている介護や今後の見通しについては、介護者の高齢化や健康状態、通院頻度の増加等に関し、不安に思っている。

また、前年度と比較して、精神症状が新たに出てきた方もおり、申請や検診時等に保健福祉センター等で、介護者の状況も含め、きめ細かい相談対応を継続的に実施するとともに、関係者間の連携を密にすることで、問題を早期に把握し、必要な支援を適切かつ迅速に提供していくことが必要である。

E. 結論

在宅での生活を送っている方々は、各種サービスを利用しているが、介護者の高齢化や健康状態など将来の不安感が強い。申請や検診時に保健福祉センター等で、きめ細かい相談対応を継続的に実施することで、問題を早期に把握し必要な支援を適切かつ迅速に提供していくことが必要である。

また、研修会では、「スモン患者さんへの関わり方の難しさがわかった」という声もあり、今後も何らかの形で継続していく必要があると思われる。

G. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

なし